
小説を書いた

中田 勘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小説を書いてみた

【Nコード】

N9721M

【作者名】

中田 勘

【あらすじ】

小説を書いてみた少年。

衝撃のラストを用意したというのが友達からは不評のようす。

とある家の玄関の前で男は目に涙を薄くためて、しかし無表情でたっていました。きつと悲しい事が合ったのでしょう。

『こつちにおいで』

それは天使の声ではありませんでした。

『いつてらっしゃい』

それは悪魔の声ではありませんでした。

『……………』

それはその二言を宣言された男の心境でした。

幾分たった後、彼は国を出て行く準備をし始めました。

「えーっと2行開けまして。『天気は良好で、でも夏だったのであまりうれしくは無い日だった』と」

「また小説書いてんのかよ。『とある家の玄

』うわっ！」

「勝手に読むなよ！」

ディスプレイに向かって小説を書いていた少年が、横から覗いてきた少年の顔を手で押しています。

「いいじゃんかよ、どうせ書き終わったら見るんだから。てか手えどける」

「出来てからだろ。今回は超ビックリな最後があるんだから」

「今まで何度それを言われたか。今まで叙述トリックしか読んだことねえぞ」

「今回は違うんだ叙述トリックのかけらも無いんだよ」

小説を書いていた少年は得意げな笑みを浮かべ体重を座っている椅子の背にかけます。

「気になるじゃねえか教えるよ」

「教えたら意味無いじゃん」

「そこで話があるんだよ洋次君。この小説を俺ら二人で書いて京香に見せるってのはどうだ。あいつも小説書いてるし他の人より感想くれると思うぜ」

「小説かけるんですかあ翔太君？」

「おっと勿論リレー小説なんかじゃねえ。俺は案を出すんだぜい」

「んー、まあ良いよ。それよりさ。……頭大丈夫？」

「うるせえテンションが上がっただけだよ。良いんなら教えろよその衝撃の最後って奴を」

「……本当にそれで良いのか？笑いより疑問が来るぞ」

「良いよ物は試した」

そうして二人は案を出し始めました。

教室にあるような机を、お互いが正面になるように引っ付けて椅子に座っています、ただし洋次の机にはPCがあり小説を書くためのフリーソフトが起動してあります。

「よし、ハードボイルド小説にしよう」

「なんで？無理だよ」

「あきらめるなよ！熱くなれよ！」

「なんかすごい熱気が伝わってきます。そんなに熱くなくても書くよ」

俺の名はにゃんにゃん、殺し屋だ。

今夜もまた相棒の銃器を使わなければならない。

『デザートイーグルを使うか』

今日のターゲットはグラנקソンという名の男だ。

1キロほど離れたビルの屋上から彼の家を狙う。

時間がやってきた。あと十数秒で彼はこのデザートイーグルのマグナム弾で死ぬ。

マガジン、サプレッサーを確認し引き金を引く。スコープを覗き左手を右手の上に添え右指をトリガーにかけ息を止める。


 B
A
N
G
 

グランクソンは絶命した。

「そのにゃんにゃんって名前なに！？　なんで1キロ先の相手に拳銃起用！？50m先でも難しいよ！」

翔太が洋次に迫っています。

「いやそれぐらいしか知らないし……。つ、次は冒険物かいてみようかな」

車で寝ていた彼は昨夜午後2時ぐらいに起きようとしていました。でも熱中症で死にました。

「この時期笑えねえ ええええええ！」

「ごめん挫折した」

「早い上に終わり方が最悪だよ。　　つたく、次ラブコメ行ってみようか」

「苦いね」

「滅茶苦茶になったらいけないから学校での告白シーンかいてみる」

放課後の学校の中の様子はいつもと違った。

男子生徒が女子生徒に告白されるのだった。

男子生徒はそのことを感づいている。

ふと女子生徒がこちらに寄ってきた。

「あなたの事が好き。だから……」

口ごもる女子生徒。

『だから……。あなたを殺して私も死ぬ!!』

そういつて彼女が後ろに回していた手にはナイフがあった。

「デープ過ぎるッ!!。」

「やっぱりダメッすか」

「もっと軽い感じの書けよ!」

「援交とか?」

「意味が違う!」

「童話。これなら結構いけそうなきがする」

暑いと思いましたが今日はみんなが集まる「森の集会」があります、外に出ないわけには行きません。

集会のときちよつと変わったことがありました。

森に人間の大人が来たのです手には棒を持っていました。

彼は結構離れた所から棒を僕たちに向けていました。

とつてもうるさい音がしたかと思うと後ろでクマさんが血を流して倒れているを見ました。

とても恐ろしいんです。さっきまで元気に笑っていたクマさんが恐怖に埋め尽くされた顔で死んでいたのです。

そんなことを考えている間に仲間たちはどんどんと死んでいきます。

僕は悟りましたアレのせいでみんなが死んでいることを。

僕は空へと飛び立とうとしましたが僕も例外なく撃たれました。

みんなこうして死んでいったのか……。

世界がなくなりました。

「小鳥さん。大人だね」

そこにはもうこれ以上何も言いはすまいとする翔太と、満足げな洋

次がいまいした。

その後、何度も何度も何度も脱線しながら、なんと製作時間3時間の冒険小説の読みきりが出来ました。

それを京香に読ませようと彼女の元にもって行きました。彼女はそれを10分弱で読み終え、感想を漏らしました。

「最初の天使、悪魔云々ってなに？」

「そこが衝撃の最後。最初の段落まったく関係ありません！！っての」笑顔で洋次が答えます。

誰とも無くとある一言を漏らしました。

「オチでないよ」

（後書き）

真面目に書いてみましょう

執筆とは表現の自由が許されている日本では良い娯楽である。

しかし日本でも表現を制限された時代もある。

実際にその場に居合わせたわけではないので、すべての情報を改ざんされて教えられているかもしれないが、それがないなら。

心の中であることを考えただけで裁かれる時代も会ったらしい。

そこからここまで来たのだそれとはとても誇れる事であると思う。

近年どうやら、いわゆるサブカルチャーの制限が始まったらしい。

表現の自由が許され続けてきたというのにここから規制が始まるとは悲しいあまりである。

しかし制限する側にも教育という理由があつてやっている。

片方の意見を尊重すると片方が成り立たなくなる。日常でもよくあることである。

お互い、ある程度の妥協がしあえるようになりたいものである。

なんか違う。

ラノベでは様々な人に感謝を述べたりしますがここでは「小説家になろう」さんと読んでくれた皆さんに感謝をしつつ、またの機会を願っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9721m/>

小説を書いてみた

2010年10月28日06時29分発行